太工
同窓会報
第4号

昭和49年10月23日

群馬県立太田工業
高等学校
同窓会

基礎から発展の年へ

会長（一期機械科）　林　進一

世間では、よく十年一昔と言いますが、太田工業高校同窓会は、第十回卒業生を迎え、早や十年を経過し、会員数も、約三千名を数える大世帯となりました。

同窓会は、申さば、縦と横との社会縮図であります。縦の縮図とは、大勢の人々が同じ校門をくぐったよしみを持って相結んでいる事です。横の縮図とは、各種各様の階級、職業の人々の集りであるのです。この様な同窓会々員の縦と横とのつながりを、今以上に緊密にするために、太田工業同窓会何々支部と言う様な、支部作りに力を入れたいと思います。現在結成された支部は、富士重工群馬製作所、東京三洋電機、興国化学の三支部が同窓会本部に登録されております。

支部結成する場合は、会社単位又は、居住市町村や勤務している地区単位などで結構です。支部に所属する同窓生名簿と代表者又支部長の氏名を同窓会本部（学校）まで連絡していただければよいと思います。

話は変りますが、第五回追指導会が東京都千代田区の科学技術館において、主に京浜地区に就職した第九・十回卒業生を対象に催されました。一・二年目の同窓生で会社や私事の悩み又学校や同窓生の現況等の連絡と意見交換を行ないましたが、皆さんのご意見も活発でお元気な様子を見まして安心しました。

席上でも、会社に帰られたら、先輩方に支部結成する様、現状を話しまして、お願してまいりました。おわりに同窓生の皆さんのご健康と発展をお祈りいたします。

卒業生名簿

校長　青山良平

私は教師になって今年で満三十年になる。十年一日のごとしと言う諺があるが、その三倍にもあたる年月を教師として過して来た事になる。然しそんなに長くも感じないし、又ついこの間教師になったような気がしてならない。

つい一ヶ月程前に前任校の卒業生名簿を入手した。まず開いたのが最初に担任したクラスの処であった。彼等は今どこで何をしているのだろうか。頁を目おくりしているといつもクラスの人気者、体育大会でよく活躍した者、クラスの世話役を買ってでるお人好、よく勉強の出来た者、真面目によく掃除などした者、時々担任を困らせた者等、ひとりひとりの顔が教室の座席位置と共にあざやかに浮んでくる。

敗戦の色が次第に濃くなり、学徒動員の名のもとに、工場で働いて、工場の休日には学校に集まり細々と授業を行ない、休憩時間に機械の間で教科書を開いて勉強していた姿がいじらしく今でも時々目に浮んでくるのである。

勉強らしい勉強もほとんどしないで翌年三月には卒業して焼土と化した社会にほうり出されて行った。よくもこんなに立派になったなあと目を見張るばかりである。

敗戦による混乱と食糧難の中で送った青春、彼等は卒業して早や二十七・八年不惑を中ば過ぎ、立派な社会人として活躍している様子を見るにつけ、うれしく思えてならない。彼等の子供達が今高校教育を受けている頃であろう。自分達が学んだ頃の学校教育と比べて複雑なものを感ずる事であろう。

よきにつけ、悪しきにつけ過去は美しく又楽しいものである。

名簿の中で気になるのは死亡と不明の文字である。

死亡した者には、只々その冥福を祈るのみであるが、不明については卒業後どこで何をしているか分らないので、担任としては実に淋しい事であり、何時も何等かの形で基地と連絡がとれるようにして置きたい。

私は卒業生名簿を眺めているといつになっても飽きない。眺めていることは会って語っているような気がするからである。

また、卒業生名簿に綴られている事が教育の成果であり、これを眺めることによって無上の喜びを感ずるのは私だけだろうか。

第五回追指導会開催

進路指導部主催の二年ごとに開催される、招集追指導会が、東京都千代田区北の丸公園内、科学技術館において第九期・十期生対象に、東京都、神奈川、埼玉、千葉県などの就職者約五十名、学校側から二十数名の先生方ご出席の下に催されました。出席者の中から原稿をいただき生の声をご紹介します。

県外就職者の一人として

全日本空輸（九期M）　小倉俊男

時折、学生気分が現れるようなまだ社会人としては、二年目を迎えている若輩者です。

全日空と言えば聞こえはいいですけど、大企業である以上個人はとても小さいものです。けれど、小さく分け与えられた仕事も飛行機の部品であるため、自信を持って整備しなければ人命にかかわる事なのです。どんな小さな部品でもこわれていたのでは、飛びません。そこに私の整備士としての喜びがあり一作業者にすぎない私がいつかは整備士になりたく思い、航空局と社内の学科及び実技試験の両方に合格する事によって、整備士として公認される訳なので私なりに努力しています。

現在の会社に入社した以上いろいろ理想は有りますが、私にも大きな失敗が一つあるのです。それは県外就職者の一人となった事です。学生気分で家を出たかったあまり、全日空を選んだのです。生まれ故郷を捨ててまでも……。こんな事を言うようになったのも都会生活を味わったからかもしれません。都会生活のむずかしさ、友だちは新たに出来るものの、雰囲気に溶け込まない、溶け込めないのです。アパートにしろ、寮にしろ、一人だけで寂しさはとても隠しきれるものではありません。

出来る事なら家へ帰りたいのですが、それが出来ないのです。次男で一旦家を出た以上意地を張りたいのです。

これは古い考えかも知れませんが社会では、まだまだ多い事なのです。そこで後輩や地元にいる先輩、同窓生に、あわてないで、ある将来まで見きわめた上で、地元を去る事です。当然そこには、男としての覚悟が必要です。

「後悔　先に立たず」

先輩はよく言ったものです。

あとへは戻れず、私の道（たとえ、迷路であっても）を進む事だけが残されています。

力の限り頑張りながら未来の道程を一つ一つ達成したいと思います。

故郷

日立製作所（九期M）　富田実希男

入社してから一年半近くなりますが、もう一年半も過ぎてしまったのかと思う位で、まだまだ、いくらもたっていないような気がしています。寮生活にも、最近やっと慣れて来た感じです。

日立という所は、特徴のない所ですが、実はそれが特徴なのです。物質的に生活しやすいように、会社によって造られた町といった感じがします。木に囲まれた広い境内を持つ神社とか、古墳、時々古い造りの商店街とかいったものがなく、情緒のない町です。

冬になっても、風はほとんど吹かず、春は霞まず、夏は一人前に暑く、秋になっても夕焼けは見えず、遠くを見渡しても連山は見えません。

現在のところ特にひどい公害もなく、寮から二キロメートルほど歩くと海辺へ、反対側には低い山が迫り、太田、館林あたりもけして広い町とは思っていなかった私にとっては、非常に狭い所に住んでいるような気がします。秋の晴れた日の夕方、又は、からっ風の吹く中で見た秩父、上毛三山、日光連山などの雄大なながめをなつかしく思っています。

以前歩いた、大小山、大平山、行道山、石尊山、金山、茶臼山、根本山などなつかしく思います。群馬は気候がきびしい。二月の風は、今でも記憶にあたらしく、校舎から見た金山は黄土に包まれ、校庭のブロック塀際に見る見る砂山が出来た事もありましたが、又自然の美しい所だと思います。特に校歌にもある「松の緑」は一際美しいです。

それに、群馬は何んとなく活気のある所に思えます。

しかし、過去は事実以上によく見える。極端に言えば、よかった事だけが回想されて来ると言っても過言でないでしょう。

卒業から一年

ソニー（九期E）
増尾逸雄

私は今〃SONY〃でラジオを作り、検査を担当しています。

「あっ」という間の一年間でした。日々に思う事は、高校生時代の事で「もう少し、真面目に勉強しておけばよかったな」と言う事です。

勉強した事が、そのまま役に立つと言う訳ではありませんが、検査をする上で、品質管理（統計学）を知らなければならないのです。工程を管理するだけならば統計学を知らなくとも何とか仕事は出来るのですが、それでは、決められた規格に従って仕事をするロボットにすぎません。ほんとうの意味での管理は出来ないのです。

品質向上を常に考えて仕事を進行しないと、トラブルばかりで、工程間は順調に製品が流れてくれません。

設計や技術陣とのトラブル対策を行なう時にも、管理上の学問と技術的要因を確実なものにして、自信を持って原因追求に発言出来なければ、他のスタッフ陣にやりこめられてしまうのです。

そのためにも、品質管理を完全にマスターしなければならないのです。この様な現実が私を目下のところ勉強させる要因となったのです。専門知識を深めて行けば、問題は提起され、数学や英語、その他が沢山出てくるのです。

そのたびに中学・高校で学んだ事をやり直さなくてはいけないので、問題が出るごとに後悔しているのが現状です。

先般の追指導会では、先生を囲んで、生徒会活動や修学旅行など思い出が同窓生の間から泉の如く湧き出て、いつ尽きるともなく話が続きました。

就職して職場の所感については、ほとんどの人が予想していた職場と多少違うという事でした。これから就職先を選定する時は、会社の内容「仕事の内容」をもう少し詳しく調べ、自分に適しているかどうか十分検討する事が必要であり、分からない点については、先生、又は会社に勤めている先輩方に聞き、それから決定した方が良いのではないだろうかと思います。

それから、もう一つ言いたいのは、「会社に入る」、いや社会に出る事と学校にいるのでは、想像以上に違うと言う事で、自分の方から積極的に聞いて行かないと、先輩方は分っているものと見なして教えてくれないのです。自分であらかじめ勉強して理解し、分らない事があったならば、どんどん聞いて先輩方の知識を一日も早く吸収して、自分のものにして行く事が大切だと思います。

社会人六ヶ月生の思い

関東電気保安協会（十期E）
武政卓二

「太陽への挑戦」

これは某氏の著書名です。私は、とてもこの言葉が好きです。今の私に無いものが感じられるからです。

中学校、高校と、現在の自分とを比べて見るのです。「それだけ年をとったんだよ」と言ってしまえばそれきりです。

あなた方は、太陽に挑戦した事がありますか、不可能と思った事に挑戦した試しがありますか、それだけのバイタリテーがありますか、「あなた方に」。中高時代に無鉄砲に反抗した方は多いと思いますが、私はそれだけでは片付けられないと思います。

「初心忘れるべからず」、と言われていますが、私は何事も貧欲にこの一年間を過ごしみようと決心したものの、六ヶ月目にして薄れているのが現状です。

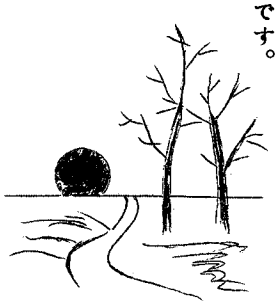
私が初めて会社に行った四月一日の感想を言いますと「のんびりした会社だな、暇だな」。そして現在の感想も入社当時とあまり変わりません。

最近、会社の色に私自身が塗り変えられて来ているとも思えて来ました。四畳半にただ一人でいる現在、努力しようと思えば、いくらでも可能性を秘めながら……会社でも自分の自由時間は二時間位とれるでしょう。それなのに、何もしないで時間を費やしている自分をなさけなく思います。

「太陽への挑戦」、全くほど遠い会社ですが、人生の滑走路へ入ったばかりの私はその言葉で、私自身に「ムチ」打って、これからの大切な時期に努力したいと思っています。

現在ある程度の金と暇はありますが、それを最大限且つ有効に使う知恵がありません。

このくらいが社会人六ヶ月生の実状です。



回顧

ディック ハーキュレス（十期Ｃ）
児島 美夫

社会人となって、六ヶ月が過ぎようとしています。この六ヶ月間が昨日のように思い浮ばれてきます。

今、学生時代との違いについて考えてみると、やはり自由な時間が少なくなってしまったと感じてきた点にあると思います。

この半年間に自分で何かやろうかと考えていながらそんな事どうしてやらなかったのかと思い、何となく在学中を思い出します。

勉強もせずに何故、あんなに多くの自由な時間を持て遊んでいたのか、もっと有効に使わなかったのかと後悔しているこの頃です。

在学中は、他人という者を必要以上に気にしていたのではないかと思うし、何も目標を持っていなかったのかもしれないと思えます。

そして、十分すぎるほど自由であったあの当時にもどってみたい気持がします。

当時、先輩が言った言葉に「学生の内にやりたい事をやっておけ社会人になったらそんな時間はないぞ。」

今になって理解出来たと思います。〃学生という人の目〃〃社会人という人の目〃この違いを何となく考えてしまいます。

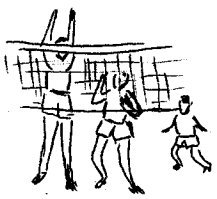
在学中は、他人の目を気にしていた私にとって、今となって考えれば、学生だからと言って何をやってはいけないと言う事もなく、だからと言って何んでもやってもいいと言う事ではないと思います。

学生時代にある膨大な自由時間と、青春の中に沈みかけている自分の肉体と精神との中で自由にそして、とことん苦しみ、泥まみれになって突き進んでいける時間だと思います。

今、自分のこの〃若さ〃でもって、がむしゃらに突き進んで行くならば、自分ではどうにもならないほどの大きな壁に突き当ってしまいます。そこで、焦燥感に悩まされたり、挫折感を味わったりして、自分の肉体と精神を傷だらけにしながら、それでもなおかつ、突き進んで行かなければならないものがこの〃若さ〃かもしれません。自分にそれだけの力があるかどうか、今の私には自信がないような気もいたします。

ただ、これからの長い人生に於て、自分自身というものを真剣に見つめなくてはならない時が何度かある事と思います。

在校先の皆さん、この三年間を有意義にかつ、思い出深い学生時代でありますよう願っております。



社会人としての自覚

千代田化工（十期Ｍ）
須藤 利夫

社会に出て、早や六ヶ月が過ぎ去ろうとしている今日この頃、会社の仕事にも大分慣れてきました。

六ヶ月の月日が過ぎようとしているのに、入社したのが昨日のように感じられます。

先ず、私の会社の大まかな内容を述べさせて頂きます。私の会社はエンジニアリング会社であり、主に石油関係のプラントや、ここ数年来脚光をあびている公害に対処するための排煙脱硫関係の公害防止設備の設計、施工、建設、試運転までの業務を国内・外を問わず行なっています。

私の業務は、自動車にたとえていえば、シャフトの部分に当る主に、機器と機器とを継ぐ配管関係のデザインや、計算などを先輩の人達について担当しています。

会社の業務内容はこれ位にして、本題にはいることにしましょう。

高校時代のように自由奔放に生活する事が出来ない事を社会人になって、真先に身にしみました。それはと言うと、学生時代は試験があるから勉強する、試験がないからやらないなどと言うように、他のものから拘束を受けて始めて行動に移すというようでありましたが、社会に出てそれではいけない事が、ひしひしと心に感じられました。人間として、社会人として生活して行く上で、ある程度の目標を持ち、その目標に向かって自から自覚する事が最も必要な事だと思います。

又、マナーについて言いますと、学生時代は適当に行なっていました。マナーは社会人として、最も重要な事であることは、社会人、学生を問わず大切な事と自分なりに認識していましたが、これほど社会が厳しいとは、社会人となってみて、真先に痛感しました。マナーは、すぐに改めるわけにはなかなか出来ないので、後輩の皆さんには、今から正しいマナーを身に付けられる事が望ましい事と思います。

入社してから

新潟鉄工所（十期M）
平田明弘

卒業してからもう半年になろうとしている現在、なぜか学生時代がなつかしく思い出されます。クラブ活動、修学旅行、工業祭と思い出を上げればきりがありませんが、ほんとうに楽しかった一時でありました。

家を離れて生活しているためかもしれませんが、よくアルバムを開いて、感傷にふける事もあります。それと同時に、ほんとうに学生時代が一番素晴らしい時であったと思っております。

蒲田工場内燃機部門に入社してから、六ヶ月になろうとしていますが、振り返って見ていろいろな経験をして来たように思えます。会社や寮での歓迎会の時、酒を飲まされ自分を忘れた事や、仕事での失敗などいろいろと、新しい経験に出会いました。そして今、私が思っている事は、歓迎会の時に飲んだ酒の苦さを忘れないようにいつも新入社員の気持を持続したいと思っています。

私が入社した、新潟鉄工という会社は、明治時代からの古い伝統を持つ企業でありまして、現在では日本でも、かなり大きな企業であります。

何を製造しているかと言うと、沢山ありますが、たとえば、船舶化工機、内燃機関（ディーゼル・エンジン）、工作機械と言うようなものであります。私の業務は先輩方に混り夢中でしており、毎日が忙しく充実しているように思えます。

私の寮は、茅ヶ崎にありますので、海水浴、釣りなどで江ノ島の方へお出向きの時は、何もありませんが、尋ねてください。

社会とは

鈴木電業（十期E）
長谷川一夫

就職して何をまず、皆さんが考えたか、それは社会の矛盾ではないだろうか。そして、今なんでこんな事をしなくてはならないのかと、多くの人は、そう思ったのではないでしょうか。

社会や会社に対して、自分が一生懸命に仕事をして、表を進んでいきたいのだが、裏が目に入ってしまいます。そして醜い、いやな問題が提起されてくるのです。まだ半年位だから、そういう事に対しての処置をどうすればいいかを考え出す事が、なかなかむずかしいのです。

自分の社会に対しての力のなさ自分の今行なっている仕事から、何かを得なくてはと、必死になっている現在です。

会社内での人間関係は、とても難しいと思っていたけれど、それほどでもないのです。皆さんがよく面倒を見てくれるのです。

社会は、魅力的であります。そして、学校では出来ないような事でも、自由奔放に沢山の事が出来何から始めてよいのか迷ってしまうくらいです。

人生とは、あせらず、一歩一歩着実に歩む事が大切なのではないでしょうか。

入社して半年後

富士重工（十期C）
伊藤孝志

早くも入社して半年を迎えました。最初は、自分の職場はどこに配属され、どんな仕事が待っているのかと不安な四月一日でした。そして実際に配属された職場は、モデル工作課といって、石膏や樹脂で実物大のモデルを作り上げていく仕事です。

現在の自分は、モデルを実際に作っているのではなく、モデルの保管や材料の保管、その他多くの仕事が、自分にかかっています。最初は、自分のしている仕事が、沢山あるので、思うように、仕事が進みませんでした。でも今日では、仕事の要領もだんだん身に着きましたが多忙な毎日が過ぎております。

会社を少し早く終業して、学校に通っています。学校も楽しい事や、つらい事がありますが、勉強していると、仕事の疲れも忘れてしまいます。会社から三人一諸の学校へ通っていて、何かと大変便利がいいです。会社には迷惑をかけておりますが、皆さんの理解によって、別に困った事は今のところありません。

高校に通ったころは、毎日がのんびりとして楽しかったが、一歩社会に出てみて、学校の良さと言うものをひしひし感じて来ました。

詩

そのかみの学校一のなまけ者
今は真面目に
はたらきて居り

ふるさとの
かの路傍（みちばた）のすて石よ
今年も草に埋（う）もれしらむ

啄木詩集より

「ふけいき」は頂門の一針か

進路指導主事　後藤友蔵

世の中には、いろいろな文化人と言う方々や評論家と言う方々が大勢おいでであって、囂しくそして難解なお話をされている。

吾が母校は、昭和三十六年に創立され昭和四十年三月に第一回卒業生の皆さんが卒業して、今日に至っているが、その間は、所得倍増や高度成長と共に歩んできており、「ふけいき」と言うものとは、余り関わりあってはいない。従って、囂しい方々のお話の中から「ふけいき」を理解しようとする場合が多い。

所得倍増や高度成長が言々される前、本校が創立される前の事ではあるが、決して古い昔の事ではない時期に「ふけいき」が跋扈していた。その頃は、理屈は別にして卑近な例をあげれば求職が大変だった。一般的な求職でも容易でなかったのだから、めぼしい所への就職、学校用語で言う「望ましい進路」を選択するには、その人自身が魅力を持たねば駄目だった。中堅技術者になり得る様な魅力、監督者になり得る様な魅力等々、とにかくその人自身が魅力を持つ事が先決であった。端的に言えば魅力の度合の順で就職が決まっていったのだ。又この頃では、人間らしい生活と言うものだけ取り上げられていろいろな所で話題になっているが、昔から「衣食足りて礼節を知る」とも言われているように、すっからぴんな生活と人間らしい生活とは仲よく同居するものではない。「ふけいき」な時の物質生活は、すっからぴんの度合の高いものであって心貧しい一面も当然含まれていた筈。

「ふけいき」は決して歓迎できるものではないが、高度成長が駄目になり総需用が抑制されていれば、向こうから勝手に寄って来る。自給自足の全く出来ない小さい島国の我々には「ふけいき」は大変な事だ。

囂しい事に馴れている人々には頂門の一針として良い事かも知れないが、その程度ですむかどうか。大変な事にならないようにしたいものだ。

死なぬ方よし

事務局

母校も創立十三年になり、三千九十四名の卒業生を社会に送り出しました。

求人などで母校を訪れる卒業生も多いのですが皆一人前の技術者として大変意欲的に活躍されているのに驚かされます。しかし、今年になって特に感じるのですが、同窓会員の死亡が多いので調べてみると、

昭和四十二年一名　昭和四十六年三名
昭和四十三年一名　昭和四十七年三名
昭和四十四年五名　昭和四十八年二名
昭和四十五年一名　昭和四十九年六名

合計二十二名で、その原因は交通事故八名、自殺四名、山岳遭難三名、溺死二名、病気三名、その他二名となっております。

交通事故の中には被害、自損も含まれておりますが、職場での事故ではなく、私生活上の事故がほとんどです。

学校生活から社会生活へと環境の変化が大きくあり職場生活での悩みや問題も沢山出てくるでしょうし、私生活面においては結婚問題をはじめ種々の問題が出て来て人生において一番変転の多い時期だと思います。

卒業後も時には、母校を訪れて担任の先生や多くの先生方と気楽に雑談や相談をされ、問題解決の糸口でもつかむ事が出来、社会生活への適応が円滑になり立派な社会人として活躍される事を切に祈っています。

学校だより

職員移動

昭和四十九年四月

堀越和佐久先生（社会）館女高へ
船戸　義澄　〃（英語）大間々高へ
沢口　宏　〃（定社）太女高へ
大槻　正也　〃（定英）　〃
戸張　巻司　〃（事務）太　高へ
田辺　久司　〃（英語）伊工高より
岡安　彪　〃（社会）新　任
岡田　孝夫　〃（音楽）富高より
若林　宏宗　〃（定社）中之条高より
高丸　善雄　〃（事務）新　任

吉田久男（電気）中島勇作（機械）両先生が教諭に昇任されました。お祝い申しあげます。

会員だより

訃報（昭和四八・九ー四九・九）

下条　明（一期C）　佐久間修司（元期M）
空井次郎（三期F）　財津邦夫（六期E）
岩崎　国（三期C）　斉藤久幸（九期E）

同窓会では、既に二十二名の方々が永眠されました。謹んでおくやみ申しあげます。

編集後記

故郷を離れ、京浜地区に就職された方々が経験した事を寄稿下さいました。会報を読まれ友好を深められます事を希望いたします。

取材にあたり、副会長・関氏のご尽力を感謝します。

（中里記）